

ま え が き

最近、日常生活のなかでラテンアメリカの一次産品を目にすることが多くなった。ラテンアメリカの一次産品というときまず思いつくのは、ブラジルのコーヒーや中米のバナナに代表される伝統的一次産品であろう。しかし近ごろはこれらに加えて、チリのサーモンやワイン、メキシコのアボガドやカボチャ、ペルーのアスパラガスなど、これまでにない新しい産品が、ごく普通にスーパーの棚に並ぶようになった。一方、あまり目立たないところでラテンアメリカの一次産品の浸透は進んでいる。例えば鶏肉である。ひところ外食チェーンの焼き鳥といえばタイ産が主流であった。しかしアジアで鳥インフルエンザが発生して以降、ブラジル産鶏肉が市場を席巻していることはあまり知られていない。

また、新聞でもラテンアメリカの一次産品に関する記事を目にすることが多くなった。特に目立つのがエネルギー・鉱物資源関連の記事である。中国の経済成長にともなうエネルギー・鉱物資源の需要拡大により、これら産品の価格が高騰した。そのためにラテンアメリカのエネルギー産業・鉱業は活況を呈している。さらに、需給の均衡が供給側に有利に傾いたことから、ラテンアメリカでは1970年代以来の資源ナショナリズムの昂揚が見られる。日本はエネルギー・鉱物資源の供給を大きく海外に依存するために、重要な供給地域であるラテンアメリカの動向に無関心ではいられない。

このようなさまざまな現象からうかがえるように、経済グローバル化が進展するなかで、ラテンアメリカの一次産品輸出が好調である。1980年代初頭まで、保護体制のもとで資源を集中的に投下され成長を遂げた工業部門の影に隠れて、一次産品輸出産業は活力を失っていた。それが新しい経済環境のもとでかつての活力を取り戻したように見受けられる。一次産品輸出産業が

活性化するなかで、その産業組織や担い手にはどのような変化が生じているのだろうか。また、一次産品輸出の拡大はラテンアメリカの経済発展にとってどのような意味をもつのだろうか。このような問題関心から、我々は平成17年度と18年度に「ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論」研究会を組織し、研究を進めてきた。本書はそのような研究活動の成果の一部である。

研究会活動においては数多くの方々にお世話になった。本書の研究手法の特徴として、一次産品輸出にかかわる生産者や企業への聞き取り調査を重視し、生産、流通、加工の現場の実態から産業組織や担い手の変化に迫ろうとしたことがある。そのために、ラテンアメリカ各国ならびに日本での聞き取り調査では、多様な産業の数多く生産者、企業の方々にお世話になった。また、研究会に講師としてお招きした立命館大学の松原豊彦教授、石油天然ガス・金属鉱業資源機構の本村真澄氏、上智大学の谷洋之准教授からは、食肉、石油・天然ガス、生鮮野菜などの一次産品輸出産業についての興味深いお話をうかがった。貴重な時間を割いて我々の研究にご協力下さったこれらの方々に、この場を借りて深くお礼申し上げたい。

なお、本研究会の成果としては別に「ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論 資料集」(調査研究報告書、2006年)が出版され、アジア経済研究所のホームページ(<http://www.ide.go.jp>)でも公開されている。本書とあわせて、これらの成果もご参照いただければ幸いである。

2007年7月

編 者